

企業名：OKI

レポート名：OKI レポート 2021

### 1. この会社が目指す姿が理解できるか

この項目は非常に理解することができた。様々なページで、2020年度を振り返るだけでなく2021年度や、場合によっては10年後の2030年を見据えた戦略(19ページの「イノベーション・マネジメントシステム」)に関しても触れていて、先を見越した経営をおこなおうとしていることがよく伺える。中でも、5ページから6ページにかけての「OKIグループの価値創造プロセス」のフローチャートは特筆に値する。2031年度の創業150周年に向けて、OKIグループが目指す姿すなわち「モノづくり・コトづくりを通して、より安全で便利な社会のインフラを支える企業グループ」が明示されており、そこに向けた中長期的な目標が設定してあることは、当社の現状をしっかりと把握し、具体的に足りないものを明らかにし、2031年度の目標から逆算して考え抜かれたことの証明であり、具体的かつ計画的に目標が練られていることは高く評価できる。

### 2. この会社の競争優位性が理解できるか

競争優位性に関しては、9ページから12ページにかけての「社長メッセージ」に記載がある。そこによると、防災や減災のためのシステムや商業施設や公共施設などで安心安全を実現するためのシステム、金融における決済システムの構築という広義のインフラを支えることが当社の使命であり、それを活かす強みとして、これまでに提供してきた製品やシステム、サービスなどの技術力、インストールベース、そして顧客との良好な関係を挙げている。また、「デジタル化の中で脚光を浴びているクラウドの世界、バーチャルの世界とはある意味対極にある、リアルの世界=エッジの領域のさまざまな現場が有する課題の解決につながる製品・サービスを創出し、『社会の大丈夫をつくっていく』ことが我々の存在価値であると信じている」という強いメッセージを打ち出している。存在価値としての競争優位性は理解することができたが、競合他社と比較した際の優位性がどこにあるのかは理解できなかった。

### 3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

「バーチャルではなくリアルの世界の課題解決につながる製品やサービスの創出」は、一見すると時代に逆行しているように感じられるが、OKIのいう「リアル」というのは、仮想空間やメタバースの対極にある、わたしたちが暮らす現代社会のことを指しており、そこで人々の暮らしを支えているものを、インターネットを活用したサービス・製品として提供をしている。ただし、このような事業に取り組む企業は日本だけでなく、世界にも無数にあり、

レッドオーシャンであるため、持続性があるとはあまり言えないであろう。

#### 4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

この項目に関しては主に 33～36 ページにて記載があり、まずは人材を人”財”と表記していた点は好感度が高い。人財育成の取り組みに関して主に 4 つの項目から成っており、そのうちの 1 つに「経営人材の育成」と題し、若いうちから経営人財・ビジネスリーダーを育成するために、選抜型のキャリアプログラムや外部ビジネススクールへの派遣をおこなう取り組みをおこなっており、当社だけでなく転職を考える際のキャリアアップには欠かせないことから、自身の人的資本を向上させられる取り組みであると考えられる。一方で、残りの 3 つの人財育成の取り組み（目標管理の徹底、評価フィードバック面談、キャリアデザイン面談）は、実行しても自身の人的資本の価値向上には繋がらないと考えられる。評価する側やフィードバックする側が当社の人間であると、評価ばかりを気にして自由な発言や発想ができにくいことが想定される。また、四半期ごとに上司が部下の目標の進捗を 1 対 1 で確認する面談は圧迫面接を想起させ、ポジティブな結果をもたらさないように思われる。以上から、この会社で自分の人的資本の価値向上はあまり望めないと考える。

当社は国内や海外だけでなく日本の官公庁をも顧客にもつことに、他社とは違う強みがあると考えられるので、官公庁と仕事をすることを想定した人財育成の取り組みを考えられるとより良いのと考ええる。

#### 5. 報告書にはどのような改善余地があるか

まず OKI レポートが、2021 年の 140 周年や 2022 年の 150 周年記念に向けたお祝い色の強い統合報告書になってしまっており、沖電気株式会社の強み等が本文を細部にわたって読まない伝わってこない点、そしてその内容が少ない点は改善の余地があると考えられる。企業外部の人間が閲覧する統合レポートである以上は、沖電気株式会社の情報発信媒体としてアニバーサリーだけでなく、この新型コロナウイルスによるパンデミック禍をどのようにして乗り越えたのか、あるいは乗り越えられなかったのか等が気になる点であり、その点についての内容が薄いように感じられた。また 2 において記述したとおり、競合他社と比較した際に OKI の強みは何であるかが把握しきれなかった。一方でグラフや図表を多用し、色使いもよかった点で見やすく、わかりやすいものであった。